

# ひきこもり当事者の老後を支え合う協同実践事業

特定非営利活動法人 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク

〒064-0824 北海道札幌市中央区北 4 条西 2 6 丁目 3 番 2 号

## 助成事業の概要

本研究事業では、高年齢化が進むひきこもり当事者の孤独孤立予防を図ることを目的に、当 NPO の 24 年にわたる「当事者性」によるストレングスを生かした「ひきこもりの老後を支え合う協同実践事業(以下:ひ老協)」を展開した。ひ老協では、中高年層のひきこもり経験を有するピアスタッフが主体となり、定期的な「道ひ老会」と呼ばれるつながりの場を 2024 年 9 月下旬から 2025 年 1 月上旬まで計 5 回開催した。「道ひ老会」は交流の場だけではなく相互学習の時間も取り入れ、ひきこもりの老いとの関係の深い 5 つのテーマ、ひきこもりと「住まい」「年金」「仕事」「介護」「後見人遺言相続」を設定。利便性の高い民間施設を借用。各回仕事をもつ家族などを踏まえ土・日曜日の午後 2 時間半を使用し前半を学習会、後半を小グループによる情報交換会として実施した。毎回関心度は高く北海道札幌市内近郊から定員 40 人にほぼ近い参加者で当事者本人も多く参加した。

また会場に来られない多くの当事者とその家族のためにオンラインを活用した「道ひ老会」も計 5 回開催し、今後想定される両親亡き後の生活上における孤独孤立防止策に努めた。緊急対応にも応じられるよう、ひきこもり地域支援センターなどとの専門機関とも積極的に連携をとりながら、支援者にも参加していただき相談につながる「当事者性」と「専門性」との協同実践を促進した。

## 事業の成果

研究事業評価調査票の回収率は 86.0% で、事業全体の満足度には、たいへんよかった 73 人 (50.0%)、よかった 49 人 (33.6%) を併せ 89.0% に達した。参加者は 40 代 50 代当事者と 70 代 80 代の親が大半を占め「講師の誠意が胸にヒシヒシと伝わった (FA)」など事業に対する満足度評価も高く、当初計画はほぼ達成されたものと思われる。とりわけ研究事業満足度評価理由の自由記述 (FA) では「質疑応答の時間も大切な学びとなった」「情報交換会が非常に生の声が聞けて良かった」「グループでの話し合い、当事者方からお話が聞けて大変良かった。今後とも引き続き活動ください。応援している」などが示すように学習会だけではなく、事前配布した質問用付箋を活用した質疑応答の時間や小グループ分けによる情報交換会を設けたことが今回の成果に結びつく相乗効果を生み出したと言えよう。

また、ひきこもり支援においてとかく注視される就労支援と経済支援との関連性については参加者が求める支援において相談支援に次いで就労支援 54 人 (37.0%) が 2 番目に多かったことや、クロス集計結果でも当事者・経験者に就労支援 57.4% の回答者が多く存在していたことから、ひきこもり当事者が何らかの形で社会的な役割をもって労働に参画し役立っているという実感を得たいと希望していることが伺えた。何かに取り組もうとする一歩踏み出す形成には当事者本人の存在価値を否定せず、周囲からの「承認」が必要不可欠である。まだまだ自分にはやれること

がある、生きていてもいいんだという価値は人間の意欲や自信に影響を与える。就労は必ずしもお金という経済面だけではない人間関係によって生み出される「人の役に立つ」という側面ももつと思われる。

限られた回数ではあったが全体を総括として「活動に感謝。心強く思っている」「素晴らしい企画ありがとう」「これからの社会で生きづらさを抱えている人に寄り添う学びの場があることを希望する」という温かなメッセージもいただいた。さらなる「道ひ老会」を発展させていきたいと考える。

## 成果の広報・公表

2025 年 1 月には研究事業の成果を測定していくために、実行委等による事後会議を開催し意見を取りまとめた。それに基づき本研究事業の成果を客観的に分析していくため、2025 年 2 月には「道ひ老会」各回で実施した事業全体を評価するアンケートによる量的統計調査法を用いて考察した。量的統計調査法については、回収できた各回の参加者による有効アンケート調査票をそれぞれ Excel スプレッドシートに入力して集約、統計ソフトウェアで解析し、各設問の単純集計に加えクロス集計を実施した。さらに、これら調査結果をもとに実行委での総括会議にて、調査結果に基づく各委員間との意見交換を図りながら、研究事業全体を実施計画に設定した目的に沿いながら研究倫理指針に従って考察を加えた。自由記述回答 (FA) については、できるだけ参加者の声をそのまま伝えていくことが重要であると考え、あえて統計上加工した質的分析を行わず、主旨を生かして個人が特定されないよう匿名転記するようにした。これら調査結果を踏まえた研究事業報告書 (電子版・紙媒体版 A4 判左無線綴じ印刷全 26 頁 300 部) を作成した。本研究事業報告書は、

各自治体が未開拓領域である「ひきこもりの老後対策」をすすめるうえでの貴重な参考基礎資料として活用されていくことを期待して必要とされる関係団体機関や希望する当事者本人や家族等に配布を行った。

## 今後の展開

当事者本人たちはさまざまな人生の葛藤を描きながらもひきこもる生活が続くなかで、いずれ何らかの「意識変容のきっかけ」が訪れるという。一つは「自分の老いに気づく」ことである。同時に二つ目には「親の老いに気づく」である。三つ目に年金暮らしの高齢者家庭生活で養われることに対して「親から限界を明言される」。四つには「散歩中の風景に感銘を受ける」ことで意識に変化が起こることもある。散歩中に公園の美しい景色をみて「変わらなければいけない」という強い思いが湧く。親も歳をとってきているしこれ以上は無理だと、進路に向けて外に出る決心につながることもあろう。このようにひきこもりの老いは少なからず私たち親子に影響を及ぼしていくことが今後予想される。

しかし人は老いたからといっても可能性が否定されるものではない。ドラマチックな変化はしなくとも、生きづらさをもつ仲間がいて互いに支え合いながら少しずつ整理し進んでいく選択肢も多くあることも考えられよう。厚生労働省が 2025 年 1 月に公表したひきこもり支援ハンドブックでは、本人やその家族が、自らの意思により、今後の生き方や社会との関わり方などを決めていくことができる (自律する) ようになることを目標としている。自分それぞれの生きたい道筋を無理なく後押しして実現可能となる社会になれるよう、これからも一当事者団体として努めていきたい。